



はじめに
〈町長とプロジェクトリーダーの対談〉

『浪江のこころ通信』は避難生活を送る町民の方々の声を伝え、ふるさと浪江への想いをつなぐ役割を果たしてきました。総集編の発行にあたり、馬場有浪江町長と櫻井常矢プロジェクトリーダーが対談し、これまでの『浪江のこころ通信』の意義や今後の『浪江のこころ通信』と復興まちづくりの展望について話し合いました。

と き 平成26年1月21日(火)

と ころ 浪江町役場二本松事務所
町長室

馬場 有 (浪江町長)

浪江町議、町議会議長、福島県議を経て、平成19年12月より現職、65歳。「協働のまちづくり」の理念の下、町民が主体的に参画するまちづくりを本格的にスタートさせようとした矢先に東日本大震災が発生。直後から対策本部を設置し、搜索や避難の対応に当たる。長引く避難指示の中、「どこに住んでいても浪江町民」を実現すべく、避難生活支援やふるさとの再生の陣頭指揮を執る。

櫻井 常矢

(浪江のこころプロジェクト プロジェクトリーダー
高崎経済大学地域政策学部教授)

東北大学大学院教育学研究科博士課程修了。博士(教育学)。専門は社会教育学・地域づくり教育。人材育成を軸としたコミュニティ再生や住民協働によるまちづくりの構築に実践的にアプローチ。現在、山形県地域コミュニティ再生促進事業アドバイザー、大崎市政策アドバイザー(地域自治組織・市民協働担当)など、市町村自治体を中心に各種の政策アドバイザーを務める。大震災後は浪江町復興計画策定委員会委員、復興支援員事業統括アドバイザー、復興まちづくり計画検討部会総合ファシリテーターなど浪江町の復興事業に精力的に取り組む。



『浪江のこころ通信』の意義

櫻井 東日本大震災から3年近くが経過し、『浪江のこころ通信』の取材をしても浪江町の皆さんの心境が変化しているのを感じています。町長からご覧になっていかがですか。

町長 昨年8月に国、県、浪江町で町民の皆さんを対象にアンケート調査を行ったところ、帰還の意向について「戻りたい」が18・8%であったのに対し、「戻らない」が37・5%、「判断がつかない」も同じ37・5%でした（「無回答」が6・2%）。震災直後は戻りたいという意向の方がおよそ60%いましたが、時が経つにつれ、色々と変化しています。ひとつは、郷に入れば郷に従えといいますが、避難先でそれぞれの地域になじんできたことがあると思います。最近は、とにかく前に進んでいこうという意向が強くなってきているように感じています。

櫻井 町の復興も、町民の皆さん一人ひとりの生活再建が進むことも、どちらも嬉しいことです。が、相反する面がありますね。『浪江のこころ通信』の取材をするときは中立の立場を心掛けていますが、一方で浪江町の復興計画や復興支援事業などの仕事をしている身としては、町民の皆さんが町からどんどん離れていくような気がして複雑な思いです。

町長 避難されている町民の心には「ふるさと浪江」が息づいていますので、絶対に忘れてはい

ないと思います。厳しい現実が目の前にあるので、とにかく人生を歩んでいかなければならず、ノスタルジーに浸ってばかりはいられないということだと思います。ただ、どこに住んでも浪江町民だという意識は、捨ててもらいたくないんです。避難先においても、浪江町の復興、再生が叶うようにバックアップしていただければと思っています。

櫻井 これまでに取材してきた中で印象に残っている方がいます。『浪江のこころ通信』を始めて私が2人目に取材をした、当時小学校6年生の少年です。避難先である群馬県の小学校の校歌を歌うたびに、浪江小の校歌を忘れてしまう気がする、忘れたくない、とその時の想いを伝えてくれました。そして、その2年後、今度は中学2年生になった彼を再取材しました。すっかり立派な青年になって、前に進んでいこうという決意やお母さんを支えていく様子が見てとれました。

町長 子どもでも、浪江で生活した時間というのは心の隅に根付いていると思うんです。その心を持ちながら、今は別な土地、空気も町においても違うところで生活し、別な友達と過ごしている。子どもたちに浪江のことを語ってもらうのは難しいとは思いますが、子どもながらに避難当時のことを記録することは大切なことだと思います。『浪江のこころ通信』は、その時の気持ちを記録することができます。その少年のように再取材をすれば、当時の気持ちと今の気持ち

がつながることになり、そうやって記録として次の世代に残していくことが大切だと思います。浪江の小学校で生活してから別の小学校へ、そして浪江の中学校ではない別の中学校にての生活になりますが、浪江という心のひだが必ず残っていると思います。

『浪江のこころ通信』と協働のまちづくり

櫻井 町長にぜひ知っていただきたいことがあります。『浪江のこころ通信』は、役場の職員の皆さんと密接に連携しながら進めてきました。職員の皆さんには本当に一生懸命取り組んでいただきました。私が最初に『浪江のこころ通信』の提案をしたのは、役場がまだ東和支所にあつた時です。当時の役場はまさに戦場のようで、職員の皆さんは仕事に追われていまして、実は、私の提案は最初、まともに取り合ってもらえませんでした。ところがその2週間後に担当職員の方と、仕事を終えた後の夜の時間でしたが、福島駅の喫茶店で再度お会いすることになったのです。その時は有志の職員の方が5、6人いらっしゃいました。その次の会合の時には、当時の広報誌担当の職員の方が、『浪江のこころ通信』のレイアウトとして考えたものを持っていらして、大変驚きました。正直なところこの取り組みは、役場のお仕事を増やすだけになるのではと思っていたのですが、皆さん本

気だったのです。それが、平成23年7月の『浪江のこころ通信』第1号の発行に結び付いています。そうした役場の職員の皆さんの熱意が、私たちをとて後押ししてくれています。

私は、震災前の浪江町が追求しようとしていた協働によるまちづくりを今こそ復興を通じて実現できないかと思っています。『浪江のこころ通信』は、役場の役割と民間の役割が組み合って実現できた成果と言えます。

町長 私は震災後、50日以上、職員と寝食を共にしました。まさに朝起きてから夜就寝するまでずっとです。毎朝6時に起きて、布団を隅に置いてそのまま朝礼をしました。当時の仕事は安否確認、住民票の再発行、健康保険証の再発行でしたが、一番の問題は、町民の所在がわからないことでした。広域的に避難して誰がどこに行っているかわからない状況で、とにかく所在確認を一生懸命やっていました。そして、東和に来る町民の方々は、着のみ着のまま避難しましたので、早く見舞金を出すようになどと訴え、職員は連日怒鳴られっぱなしでした。そのような中で櫻井先生がこの『浪江のこころ通信』を提案してくださった。あくまでも非常時の職務をする中で、町民の気持ちをつなぐという、最重要課題はまさにこれだと職員も思ったのではないのでしょうか。

浪江町では、震災前から協働のまちづくりを推進していましたが、この震災は本当の意味で協働のまちづくりをするチャンスなのではない

か。チャンスというのはあまりいい表現ではないですが、町の再生のために町民の皆さんの力を借りて、今まで議論してきたことを実践に移せる機会なのかなと思いました。

櫻井 協働というのは、危機や課題が目の前にあるからこそ必要になる手段です。役場だけでは解決できない課題があるから、町民の皆さんや地域の力も借りながら進めていく。逆に町民の皆さんだけでは解決できないことを役場の力も借りて解決していく、ということですね。同時に私は、被災者が主体となった復興が重要だと思っています。ひとは他人から支援や施しを受けるだけでは、いつか疲れてしまう。ひとは他人に喜ばれたり、感謝されたりすることで人間らしく生きていけるはずなんです。だから、被災者自らが主体的に活動をしながらか復興を進めていくことが大切だと思っています。例えば、『浪江のこころ通信』の場合、被災者である町民の方が取材する側になっていただくと、会話が組み合って円滑にいくことも多いですし、町民の皆さんの声を『浪江のこころ通信』を通して発信できたという喜びにもなります。

■町民の想いを伝える

『浪江のこころ通信』

櫻井 『浪江のこころ通信』を始めようと思った理由のひとつに、町民の皆さんがお互いに意見や想いを交わせずにいるはずだと思ったことがあ



ります。つらい思いをしていても、そのつらさを話し合えない環境にある。掲載される記事は、数は限られても想いを共有する手段になりえないか、と思ったのです。

町長 恥ずかしながら、私が震災後、家族に会ったのは震災から50日過ぎてからでした。震災当時は心配ですから自宅に行ってみたら、無事避難したから安心してください、と張り紙がしてありましたが、どこへ避難したのかは書いていないんです。携帯電話は持っていましたが、家族も私の仕事から遠慮したのか、会うまでにそのくらいかかりました。それくらいの時期になつてやつと、町長元気でいるか、と知人から電話が来たり、役場に訪ねてきてくれたりしましたね。普通の状態なら隣近所、あるいは行政区単位でいろいろなイベント、まちづくりのことを考えたりしていたのがバラバラにされてし

まい、話をする相手もなくて皆さん難儀したはずです。それが、ある程度心の余裕もできて、電話帳の「みんなの連絡帳」を発行したりして、やっとコミュニケーションができる状況になり、その間相当の時間を要しました。

櫻井 この取り組みを始める際、ひとつだけ役場に約束していただいたことがあります。「取材者の原稿は役場の検閲を受けないこと」というものです（笑）。取材をすれば、役場にとって都合の悪いお話が出てくるかもしれない。けれどもそれを役場にとって都合よく編集するのではなく、そのまま載せていただきたい、ということでした。

実際、町長への厳しい言葉が書かれた原稿がありました。普通なら役場の担当者の段階で「これでは困ります。」となりそうなものですが、当時の担当者は掲載について町長に相談し

たそうですね。すると町長からそのまま載せて良いと言われたとあとで聞き、その寛大さに驚いたのですが。

町長は、その時のことを覚えていらつしやいますか。

町長 よく覚えていますよ。私はとにかく苦情係みたいなものでしたから。最近はずいぶん減りましたが、最初の頃は住民説明会にしても罵声を浴びせられていました。

最近でも情報公開をしていない、とよく言われます。私どもの知りえることは全部出しているのですが、町民からすると何か隠しているのではないかと思われる。新聞に情報が載ると、役場に來てまた隠していたのか、と。そうではなくて政府が出した情報なんです。

広報は町の発行物ではありませんが、震災後、広報誌を発行するとき、これまでの活字の情報ばかりではなく、町民の生の声、写真も載せたほうが良いと言いました。「中には町長の悪口もあるが載せて良いですか。」と職員が言うので「良いよ。」と言いました（笑）。

■ふるさと浪江への想いを つなぐ『浪江のこころ通信』

櫻井 最近、取材を拒否される町民の方が増えてきています。自分の心の中をさらけ出すことに抵抗がある、あるいは浪江には帰らないと決めてしまったことを理由にどこか心引けること

があるなど、様々な背景があるようです。

町長 『浪江のこころ通信』はこれからもぜひ続けていきたいと思っています。新たな人生を踏み出したとしても、そういうものを載せて、その中に浪江の思い出などを話してもらい、ふるさと浪江をひと時も忘れない、そんなお話が聞けたらうれしいですね。

櫻井 そうですね。これからの一人ひとりの生き方や生活のスタイルが多様であつてよいということは、『浪江のこころ通信』に掲載される町民の皆さんの生の言葉を通じて伝えていきたいことです。

町長 もともと浪江は2万1千人の人口を抱えていたので、2万1千通りの考え方、意見があります。それで良いんです。ふるさと浪江というシンボルに向かつてどうするかを考えていくんです。

共有して向かっていくというのは、例えば今までのお祭り、イベントなどにも言えます。2月は浪江町では安波祭りがありました。大漁祈願、五穀豊穡の歴史的なお祭りです。それに付随して田植踊り、裸参りがありました。そういう伝統を避難先でもやろうという動きがあります。また、スポーツ大会もソフトボール、バレーボール、ゲートボールなどいろいろあり、開催するとやはり昔の仲間が集まります。そういうきっかけが必要だと思っています。それはやはり伝統であり、芸能であり、スポーツである。皆さんで共有して再現することが大切です。



B-1グランプリのなみえ焼きそばや、駅伝大会もありました。全国に避難している方々が、全員集まっつての練習もできないまま浪江町のゼッケンをつけて出ていく。沿道の町民の方々も旗を振って本格的な応援をする。そういう動きを大切にして、支援していきたいと思えます。

■これからの

『浪江のこころ通信』と復興まちづくり

町長 『浪江のこころ通信』では、浪江町と直接の接点がない多くの方々にも取材にご協力いただきました。震災を受けてから、ほかにも全国津々浦々から様々なおもてなしをいただきましたが感謝申し上げます機会がなかなかありません。

町民の皆さんからは、『浪江のこころ通信』は広報誌で一番読みたい記事で楽しみだ、と言われます。町民の方の苦しみ、悲しみや、今何をしているかが書いてあるので、他の人にとつての道しるべになるかもしれません。子どもの写真が掲載されて、同級生とのつながりを思い出して電話したり、連絡が途絶えていたものが再開したりするという話もよく聞きます。私も、ああ、この人はここにいいのか、この人は元気で暮らしているようだ、と安心したことがありますし、記事を読んで泣いたこともあります。できればこれからも続けて、町民のこころをつ

ないでいただきたい。

櫻井 私の理想ではありますが、いずれ町への帰還が始まっても『浪江のこころ通信』は必要だと思っています。

町長 これからの復興ですが、これだけひどい災害を受けたので、災害研究都市のような考え方も必要だと思っています。地震、原発事故などを研究し、次の世代に引き継いでいく。記録を残しながら、悲惨な思いをした経験をずっと伝えていく。そして新たな減災のまちづくりを目指すかと思っておりますが、そのためにも『浪江のこころ通信』のような心の記録は重要だと思っております。

